

『新美南吉の志』

小学校2年生だったか3年生の時だったか、国語の授業で「手袋を買いに」という物語にふれたことを覚えています。母ぎつねがどうしても人間の住むところ行くことができずに、子ぎつねひとりで手袋を買いに行かせるという話です。手が冷たいと訴える子ぎつねに手袋をはめさせてやりたいという母ぎつねの葛藤、きつねだとわかりつつ手袋を売り渡した人間のやさしさ、無事子ぎつねが戻ってきた時の母親の喜びようなど、登場人物の心情や場面を思い描いたことが今でも鮮明に蘇ってきます。

教員になってからは、4年生を受け持った時の国語の授業で扱った「ごんぎつね」の教材が強く心の中に残っています。数ある物語教材の中では、子どもたちが強い興味を示しながら登場人物の心情を深く味わうことができる優れた物語であったと思っています。

これらの物語の作者は愛知県半田市出身の童話作家の新美南吉（大正2年～昭和18年）です。南吉は4歳で母と死別し、8歳で母の実家へ養子に出されます。小学生の頃は、おとなしく目立たない子でしたが、作文の才能に恵まれ、成績は良かったといわれています。中学2年の頃から、文学に目覚め、詩、童謡、童話、小説、脚本などを書き始めます。

読書の量も多く、雑誌への投稿もさかんに行っていたようです。子の頃から、アンデルセンを凌ぐ童話作家になることを夢見るようになっていきます。

昭和6年5月 初めて南吉の童謡が雑誌「赤い鳥」に掲載され、翌年1月には、童話「ごんぎつね」が掲載されます。この年4月、南吉は東京外国語学校（現・東京外国語大学）英文科に入学します。この学校を卒業するまでの間に結核をわずらいます。卒業後、貿易商會に勤務しますが、二度の咯血をして帰郷せざるを得なくなります。

帰郷してから、尋常小学校での代用教員や肥料会社に勤務しますが、この頃が南吉にとって最も苦しくつらい時期といわれています。

その後、安城高等女学校の教員として勤めます。

昭和16年、初の単行本「良寛物語 手毬と鉢の子」を刊行。翌年には、初の童話集である「おぢいさんのランプ」を刊行します。

昭和18年1月に病状が悪化し、2月に南吉は安城高等女学校を退職します。そして、3月、29歳の若さで逝去します。

南吉にようやく陽が差し始めたのは、教員となった昭和13年から亡くなるまでのわずかな数年で、この間に今日代表作と目されるすべての作品を書ききっています。南吉の死後、童話集「牛をつないだ樁の木」「花のき村と盗人たち」の2冊が相次いで刊行されています。

「余の作品は、余の天性、性質と大きな理想を含んでいる。だから、これから多くの歴史が展開されていって、今から何千何百年後でも、もし余の作品が認められるなら余はそこに再び生きることができる。この点において、余は実に幸福といえる」
これは、南吉が中学3年の時に自由日記に記した志の一端です。

わずか29年間の生涯の中で、病気とたたかいながらも、今でも多くの人たちの心に忘れられない感動を与える名作を数多く生み出した新美南吉の功績は見事なものであるといえます。中学生の頃の日記に残されている南吉の言葉にはとてつもない志の高さがうかがえます。その志は自分の名を後世に残したいというものではなく、人の心の動きや心の持ち方、他をいたわる心情、人と人との互いにわかりあうことなどをテーマとし、いつまでも心に残る作品を通して人々に訴えたいという思いが強かったのではと私は勝手に思い込んでいます。

これからも、新美南吉の作品にふれ、その素晴らしさを多くの子どもたちがわかってくれることを願います。